

令和3年度 図書館報告

資料の構成

(令和4年3月31日現在)

1. 図 書	蔵書数	1 2 8, 1 4 5 冊
	年間受入冊数	7 0 4 冊
2. 雑 誌	所蔵雑誌 種数	2 5 0 種 (内国誌 2 0 6 種, 外国誌 4 4 種)
	年間受入雑誌 種数	1 1 4 種 (内国誌 1 0 4 種, 外国誌 1 0 種)
3. その他	新聞 種数	1 1 種 (内国誌 7 種, 外国誌 4 種)
	視聴覚資料 所蔵数	1, 4 3 0 点
	データベース	Academic Search Elite, PsycINFO, 医中誌web, MAGAZINE PLUS, 国立国会図書館デジタル化資料サービス, 聞蔵, 河北新報データベース, 山形新聞記事データベース

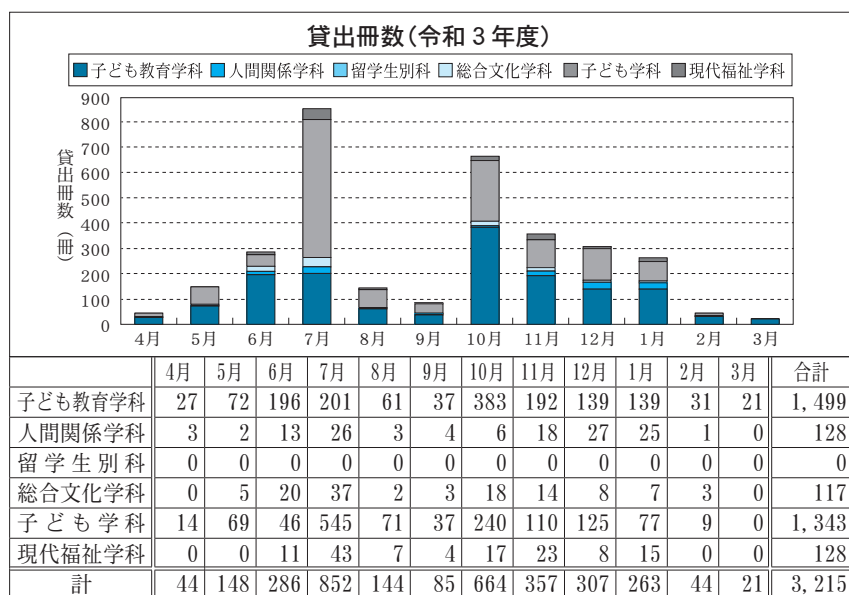
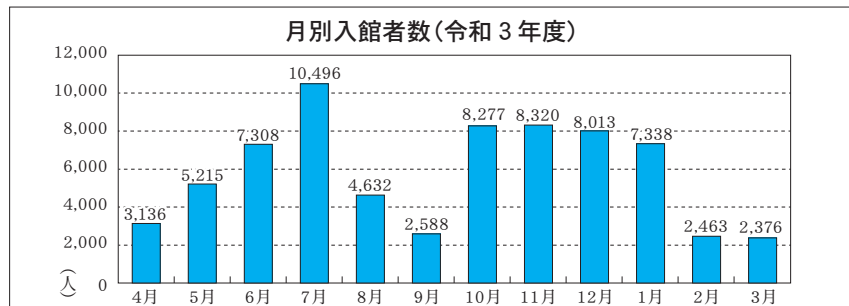
利用状況

- 開館日数 228日
(参考: 令和2年度 245日)
- 入館状況
 - 月別入館状況
入館者数(延べ数) 70,162人
 - 一日平均入館者数 308人
- 館外貸出状況
 - 学科・月別館外貸出冊数
年間貸出冊数 3,215冊
(参考: 令和2年度 3,367冊)
(参考: 令和元年度 4,600冊)
 - 一人当たりの年間貸出冊数推移
参 考

	令和3年度	令和2年度	令和元年度
子ども教育学科	4冊	4冊	5冊
人間関係学科	3冊	-	-
留学生別科	0冊	0冊	1冊
総合文化学科	3冊	2冊	4冊
子ども学科	8冊	9冊	10冊
現代福祉学科	2冊	2冊	5冊
本学平均	5冊	5冊	6冊

サービス提供状況

- 相互協力業務
(他大学から文献取り寄せ・または提供する件数)
図書借受冊数 5冊
(参考: 令和2年度 3冊)
図書貸出冊数 0冊
(参考: 令和2年度 0冊)
複写取寄件数 49件
(参考: 令和2年度 47件)
複写提供件数 6件
(参考: 令和2年度 1件)
- 学内文献複写 複写枚数 440枚
(参考: 令和2年度 258枚)
- 学内参考業務 受付件数 99件
(参考: 令和2年度 141件)
- 貸出ノートPC 貸出件数 793件
(参考: 令和2年度 584件)
※令和3年5月よりSurface貸出開始のため増加



令和3年度 新型コロナウイルス感染症対策の取り組み

- 開館状況 ※消毒作業のため1時間短縮して開館
(通 常) 平日 8:30~18:00 土曜 9:00~16:00
(授 業 日) 土曜 8:30~17:00
- 開館時の利用制限
 - ・AVコーナーでのヘッドホン貸出休止
 - ・集密書架の利用制限(3名まで利用可能)
 - ・グループ学習エリアの座席減少
- 館内の感染対策
 - ・館内の換気
 - ・入口への消毒液の設置、カウンターへ飛沫防止対策板の設置
 - ・返却された書籍、PC等の消毒
 - ・3密での利用、マスク未着用での利用時の注意
 - ・閉館後、1時間かけ、机、椅子等接触する箇所の消毒

[この取り組みは、令和4年度も継続し状況に併せて対策を行っていく。]

Tohoku Bunkyo College・Tohoku Bunkyo Junior College Library Newsletter

東北文教大学・東北文教大学短期大学部 図 書 館 報

発 行 東北文教大学・東北文教大学短期大学部附属図書館 〒990-2316 山形市片谷地515 ☎023-688-7544

目 次

- 書物という海、図書館という寄港地…………… 1
- 教員の本棚から…………… 3
- 私のおすすめ本…………… 3
- 令和3年度 図書館報告 …………… 4

書物という海、図書館という寄港地

人間関係学科 教授 大 江 篤 志

子どものころから本を読むのはいやではなかったと思います。

母や祖母の話では幼いころには絵本を読んでいたようですが、本の記憶は幼稚園の『キンダーブック』に始まるような気がします。小川末明の作品などが載っていました。小学校時代の本といえば月刊誌の漫画本でした。『少年マガジン』や『少年サンデー』などの週刊誌が出版されたのはずっと後のことです。私の購読誌は『少年画報』で、当時人気の「赤胴鈴之助」や「ビリー・バック」が載っていました。一方の人気漫画だった『鉄腕アトム』や「鉄人28号」は『少年』掲載で、友達と貸し借りしたものです。そういえば杉浦茂のなんともいえないシュールな漫画もありました。

図書館とのつきあいの始まりは小学校のころでした。春夏秋は学校から帰れば外で遊んだり家の手伝いをしたりしていましたが、雪国の冬はスキーに行く他は家の中にいることが多く、暇つぶしに — テレビが家にきたのはローマオリンピックの前 — 時々図書館から本を借りて読んでいました。会津若松での高校時代に教科書に出てくる本が町の書店でごくふつうに手に入れることができるのを知り、田舎者の私はとてもびっくりしました。

大学の卒論は研究室の書庫でジャーナル類を読む程度で済みましたのでそれほど図書館に行くことはありませんでした。読みたい本は文庫や新書で買っ

ていたと思います。岩波文庫は☆1つが50円でした。両切りのショートピース10本入り1箱が50円しなかったような気がします。

実際のところ私は小説やエッセイなどを読むのが好きです。小説というと何となく現実感が薄いという印象があるのですが、面白い小説はそういうところを感じさせません。作家の力量なのでしょうね。ところで『万葉集』に大伯皇女の「わが背子を…」の歌がありますが、大昔の出来事のことでもあり、死に向かう弟を見送るのはつらかったでしょうね、くらいに思った程度でした。その後『続日本紀』の大宝元年の項に「大伯内親王薨ず」の一行を目にしたときに、突然にその女性が暁のなかに静かにたたずんでいる姿が生々しく立ち上がってきました。ブルーストではありませんが記憶の蘇りは様々な刺激と結びついているのか、と実感しました。

小説やエッセイなどは好きで読んでいます。したがって好き嫌いがあります。しかし自分の研究に必要な文献は読みたくて読むものでも、読まなければならないから読むものでもありません。畑は耕すもの、庭は手入れをするもの — それと同じように、たとえどのようなものであっても研究文献は読むものなのであり、それに理屈などありません。

大学の恩師、安倍淳吉先生に教わったことの1つは、「とにかく原書にあたりなさい、原書を読む暇がなければ手に取って触っておきなさい」というも

のでした。今は原書どころか訳書も読まず、検索エンジンで必要な知識を手に入れて分かったような気になっている人が結構いることに驚いています。それはそれで便利なのは十分に承知していますが、ほどほどにしておきましょう。

大学院に入ってから専門書は大学近くの古書店街や丸善で入手していましたが、古い和書や洋書をみるのに大学の図書館に行くことがありました。またこのころになると何を研究するのかを本格的に固めなければならないので図書館に行ってあれこれ書物を眺めることも増えたのですが、その時のがっしりした机や高い天井がおぼろながら記憶にあります。

自分の研究テーマが姿をとり始めると研究用の文献を探す仕事が始まります。ノートを1冊用意して、図書館の木製のキャビネットに収められている図書カードを1枚1枚めぐりながら、これはと思う書物のタイトル、著者、出版年、出版社をそのノートに書き込んでいったのですが、どれほどの時間がかかったのか、いまとなっては少しもおぼえていません。そのノートは今も本棚のどこかにあるはずですが。いまならパソコンにキーワードをいくつか入れれば関連する図書情報が瞬時に山ほど手にはいりますが、当時は図書カード頼みの時代でした。

ところで私のテーマからして2つの方向からの研究が必要でした。

1つは地域社会をフィールドとするフィールドワークです。このために小離島をフィールドにして35年ほど調査をしました。フィールドワークというと現地調査が中心と思われるかもしれませんが、基本は文献研究です。その一環として各種の資料や文献も必要でした。これには地域の古文書や歴史書、文化人類学や民俗学の文献、水産学、気象学、地質学、流体力学、水産統計、地域中学生の進路動向、漁協の業務報告書、仲買業者が控えていた買い入れ販売ルートの記録など、およそ専門の社会心理学とは縁のない文献や資料が含まれていました。これらの文献や資料は図書館、水産庁の統計情報出張所、各区の水産研究所、地域の中学校や教育委員会、地域漁協などで収集しました。

もう1つは文献をフィールドとする理論研究です。テーマが学際的なこともあり社会心理学の他に社会学、文化人類学、心理学など、いくつもの学問領域の文献が必要でした。テーマが決まると必要な文献は自ずと定まってきますが、所属大学に必要な文献がいつでも所蔵されているわけではありませんので、他大学、他機関の図書館に依頼しなければならぬことが多くなります。いまでは図書館の相互利用係に必要な書誌情報を持参すればインターネッ

ト経由で国内外を問わず必要な文献をほとんど、しかも短時間で入手することができますが、昔はそのような便利なものはありませんでした。

まず必要な文献がどの図書館にあるかは『学術雑誌総合目録』で調べますが、分からなければ図書館の担当の係の人が探してくれます。係の人は所蔵している図書館宛に「文献複写申込書」を作成し、それを当該の図書館長宛に郵送します。今私の手元には昭和61年8月25日付けの申込書があります。送り先の図書館の受付は昭和61年9月1日でしたから、1週間ほどかかったわけです。料金の種別は「電子複写」、学外1枚40円で、11枚でしたので、440円です。送料が170円で610円の支払いです。支払いは図書館がしてくれるので、代金をもって行って複写論文を受け取ったのですが、図書館に申し込んでからどのくらい時間がかかったかはおぼえていません。

それがある時からインターネットで論文の請求ができるだけでなく、オンラインの雑誌は図書館に行くとその場でプリントアウトしてもらえることも多くなり、必要な文献を手に入れる時間が飛躍的に短縮されました。

図書館の方々のおかげで手に入れることができた文献は私のやり方で1つ1つデータベース化しています。現在のところ5千点以上ありますが、未整理の分を加えると6千点ほどになります。問題は生きているうちにこれらの文献を読み、文献をフィールドとする理論研究に終止符を打てるか否かなのですが、はてどうなることでしょう。この作業に集中する時間が少しでも多く欲しいと思うようになっています。

私の作業場となっている阿賀町鹿瀬（新潟県）の家の物置の本棚にはこれから目をとおしていく文献が並んでいます。大学院時代から集めた文献は今の私にとっては日夜大波が湧き立つ大海のようです。自分の生涯の研究テーマをあれこれ考えながら書物をめくっていた時の、あの重厚ともいえる図書館がこの大海に乗り出した最初の出港地であるとすれば、必要な文献を積み込むために立ち寄ったそれぞれの図書館は寄港地のようなものです。寄港地ですからいつまでもとどまっているわけでもありません。必要なものがある時に立ち寄る港、それが私にとっての図書館なのかもしれません。

いつのころかははっきりしませんが、前任校を退職する最後の1日は大学院時代の図書館で過ごすことに決めていました。そのように過ごせたことが私の人生の区切り、文献の海に船出する最後の寄港地であり出港地になっているような気がしています。

教員の本棚から

子ども教育学科 講師 杉中 拓央

『音声学者、娘とことばの不思議に飛び込むーブリチュワからカピチュウ、おっけーぐるぐるまでー』

川原繁人 著 朝日出版社 2022.5 (801.1/カワ 1 F 一般書架)

今年度より着任した杉中と申します。山形の高い空、蔵王連峰を滑る大きな雲の影に、日々感激しています。まだ冬の厳しさを知らないで、このようなことが言えるのです。ともあれ、このような環境の下、学生時代を過ごす皆さんをうらやましく思っています。

ところで、詩人のポール・サイモンさんは“I have my books and my poetry to protect me”.と書きました。皆さんは、自分自身を守ってくれるような本や詩を持っていますか？かという私は持っていません。あまり、本を読んでこなかったからです。当時の私にとって図書館は、ちょうど山形ー新潟間ほど、近くて遠い距離感でした。それがため、他者に何かを伝えたいとき、いつもワンパンチ足りない気持ちがします。わずかハナの差、本意を伝えきれない実感があります。きっと、読書をしてこなかったせいだなあと今更、思いあたるのです。たくさんの本に触れることは、言葉を扱う力を深め、みずからの考えを誤解なく、かつ余すことなく他人に伝える糧であり、異なる考え方を受けとめ、社会の多様性を認めることにもつながるなあ…と考えます。このことは、教師や保育職、あるいはどこで働くにしても、他者と関わり続ける限り、不可欠な視点ですよ。なので、学生の皆さんには、盛れている写真のみならず、読書量も誇ってほしいなと思います。きっと何より魅力的です。

前置きの長すぎるレポートは、あまり歓迎されません。今回、紹介させていただく一冊は「音にはイメージがある」として、アニメキャラやヒップホップ、そして赤ちゃん言葉等を題材に、音声学の基礎を述べたものです。固有名詞のもつ音の響きが、そのキャラの印象に影響するところ大であることは、皆さんも何となく気付いていたのではないのでしょうか。主人公、悪役にはふさわしい音があります。ゴジラがもし、コシラだったら弱そうです。でも、すべてを破壊しつつ前に許してくれそう。そんな具合に、実は皆さんの「名前」にも、他人が聴いて魅力的に感じる音や、さまざまな印象をもたらす音が含まれているようです。「名は体を表していますか？」ぜひ、本書で調べてみてください。

また、保育職をめざす皆さんは、子どもの幼い言葉遣いの原因を、発声器官が未成熟であるからと捉えてはいませんか。実は、そんなこともないようなのです。木い、血いのように、1文字の日本語を自然に発音するためには、2文字分の長さが必要で、大人であれば「木“が”」、血“が”」という助詞をつけることで、そのリズムを補っているようですが…子どもも負けじと工夫しているようです。そんな発見の数々が、著者のお嬢さんが二歳の手前で「語彙爆発」するまでの微笑ましい記録をとおして、考察されています。

本書の良いところは、読みやすさに加え、実験結果等も併記されていることで、素朴な問いを科学的に裏付ける、学術書としても優れている点です。理論と実践、そして遊び心のバランスが良いのです。先生になる皆さんには、こんな授業をしてほしいと思う一冊です。

最後になりますが、先に述べた「イメージ」「名は体を表す」という切り口には、ともすれば残酷な趣があります。社会にいれば、見た目や育った環境、その他諸々、他者の安易な評価から逃れることはできません。あるいは、ここに音の響きも入ってくるのやもしれませんね。しかしながら、それはあくまで一時的な出来事にすぎません。不本意ならば、身をもってそれを覆し、ギャップ萌えをめざしたいものです。でも、周囲に本当の気持ちを知っていただくためには、言葉をえらび、適切な説明をしないといけない。そこには、やはり語彙と、それをうまく編む力が必要になります。つまるところ、たくさんの本を読んで、自分だけの言葉を持つことで、できるだけ楽しい人生をやってほしいなあと思うのです。

図書館学生アルバイトの「私のおすすめ本」

阿部 莉央那（人間関係学科1年）

『+1cm たった1cmの差があなたの世界をがらりと変える』

キム・ウンジュ 文、ヤン・ヒョンジョン イラスト、築田順子 訳 文響社 2016.7 (159/キム 2 F 一般書架)

皆さんは「空色」と聞いてどのような色を思い浮かべますか。おそらく青や水色を思い浮かべたのではないのでしょうか。しかし、夕焼けのオレンジだってくもりのグレーだって「空色」です。先入観や固定観念を持ってしまうと、一方向からしか捉えられなくなってしまいますが、考え方や見方を少し変えればマイナスがプラスにもなります。この本は、そんな考え方の変換のヒントを、コミカルなイラストとともに教えてくれます。人間関係・仕事・恋愛など、ジャンルはさまざまです。一見分厚い本に見えますが、ひとつの項目についてのページ数が少なく、絵本のように読むことができるので、じっくり本を読む時間が取れない方や本を読むのが苦手な方でも気軽に読める一冊です。

私はものごとをネガティブに考えがちなのですが、同じような言葉でも考え方によって意味が変わるのであれば、プラスの意味で使っていきたいと思えるようになりました。

心が疲れた時や寝る前のちょっとした時間、スマホを見る代わりにこの本をぜひ読んでみてください。この本を読んだ後には、何か嫌なことがあっても“案外大したことないな”と思っているかもしれません。

上記の図書は図書館で所蔵しています。ぜひご利用ください。

